

報 告 書

平成 22年 4月 1日

佐賀県バスケットボール連盟審判部

審判長 福島 孝生 様

同県審判員 氏名 立石 耕一



3月27日(土)～30日(火)に国立代々木競技場第一体育館・第二体育館で実施された第41回全国ミニバスケットボール大会において審判員として活動した内容を、下記のとおり報告します。

記

1 日程

3月27日(土)・審判会議

3月28日(日)・開講式 講師 平 育雄氏 山田 巧氏 清水 幹治氏 野口 浩正氏

・女子予選リーグ 代々木第一体育館 Cコート第5試合

白河 MBB スポーツ少年団(福島県) 30 対 28 古志原クリッパーズ(島根県)

主審:小野氏(静岡),副審:立石(佐賀),主任:三谷氏(香川)

3月29日(月)・男子予選リーグ 代々木第一体育館 Dコート第7試合

山田ミニバスケットボールスポーツ少年団(岩手県) 33 対 34 屋島ミニバスケットボールクラブ(香川県)

主審:千葉氏(大阪),副審:立石(佐賀),主任:武内氏(高知)

3月30日(火)・女子準決勝 代々木第二体育館 Fコート第1試合

船越ミニバスケットボール部(静岡県) 34 対 49 東希望が丘ミニバスケットボール部(神奈川県)

主審:久田氏(兵庫),副審:立石(佐賀),主任:横山氏(関東ブロック長)

・閉講式 講師 平 育雄氏 山田 巧氏 清水 幹治氏 野口 浩正氏

2 報告

今回、初めての全国派遣とあって、喜びと不安などの様々な思いをもって開講式に臨みました。

1日目は、女子予選リーグのゲームを小野氏(静岡)と吹かせていただきました。ゲームに入る前に、「しっかりとアイコンタクトを取って行きましょう。」「ゲーム中に話していきましょう。」「ゴール下が狭いのでトレールでカバーしていきましょう。」「しっかりと視野の分担をしましょう。」という話をして臨みました。ゲーム中は、ゲームの流れをお互いに話し合いながら、予測を立て対応することができました。気になったところは、リバウンド争いでの手の使い方です。相手プレイヤーをプッシュしてからのボール保持が何本かあったのではないかと思います。ミーティングでは、三谷氏(香川)に「ゲームの終わり方で、センター付近での接触とオフェンスファールかどうかの確認という2つのケースを締めるべきだった」と指摘されました。

2日目は、男子予選リーグのゲームを千葉氏(大阪)と吹かせていただきました。プレカンファレンスは、マニュアル通りの丁寧な話し合いとなりました。今後のプレカンファレンスの参考としていこうと思いました。ゲーム中は、1日目のゲームと同じく1点を争うシーソーゲームになりました。お互いゲーム中に次の展開を

話し合い予測しながら進めたので、ゲームの流れをしっかりとつかみコントロールができました。自分の笛としては、トラベリングの判定でゲームの流れに即さないものを1つ取ったのが違和感に残りました。ミーティングでは、武内氏から「2人でよく見に行こうとする姿勢が感じられた」と話をいただきました。平氏からは、「子どもたちのプレーやベンチのプレーを出させて、両チームとも納得のいくゲームをさせることができていた。よくコントロールしていた。」と話をいただきました。私に対しては「スタート時でのスペースの見方、流れを早くつかむ。」と指摘をいただきました。

最終日は、女子準決勝のゲームを久田氏（兵庫）と吹かせていただきました。前日までと同じくゲームの流れを話し合いながら対応していくことができました。ミーティングでは、横山氏から「動きが習慣化している。」と指摘をいただきました。ケースとしては、トレールからリードに入るときを挙げられました。プレス時にトレールだけに任せすぎている見方があり、もっと考えながらリードに入るようにアドバイスをいただきました。

全日程を通して、レベルの高いゲームでの審判の役割やこれからの自分の課題を知ることができました。「子どもたちのプレーやベンチのプレーを発揮させ、邪魔をしない審判の笛を吹く」ということは、今大会で強く感じたことです。これからの自分の課題は、「動きの習慣化から柔軟な動きへ」や「大胆なオフボールの見方」です。また、全国初派遣でいただいた最終日の割り当てに見合った笛を維持し、さらに向上できるようにしていかなければと感じています。

最後になりましたが、佐賀県バスケットボール連盟、県審判部をはじめ、平素よりお世話になっている関係者の皆様方には、今回全国ミニバスケットボール大会に派遣していただき、本当にありがとうございました。学んできたことを自分だけではなく、周りにも還元していき、もちろん審判に限らず、佐賀県バスケットボールの発展に役立てるよう、これからも精進していこうと思います。ありがとうございました。

唐津市立佐志小学校 教諭 立石 耕一